

世界仏教文化研究センター  
リレーエッセー

## コロナ社会で共に生きるために

No. 5

### 「いろは歌」雑感



西域総合研究班長  
龍谷大学国際学部教授  
三谷真澄

「いろはにほへと ちりぬるを・・・」ではじまる「いろは歌」。日本語版完全パングラムであるとともに、仏教の「無常偈（雪山偈）」や「三法印」とも関連する、まさに、日本の言語文化の粋と言って良い作品です。

担当している「仏教の思想 A」では、毎年、受講生全員が暗唱できるようになるよう努力しています。今年は、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響で、全授業がオンラインとなったため、種々方法を考えましたが、一方向型で使用しているソフトでは難しいと判断し、別の方法をとりました。アンケートをとったところ、62名中、「知っている」と回答した受講生は、91.9%でした。一方、「全て言える」と回答したのは27.4%でしたが、歴史的仮名遣いを含む47文字を重複することのない形で、完全解答できたのは4名と6%程度でした。学部は複数にまたがるものの、例年ほぼ同程度で推移しています。以前、担当させていただいたRECの「仏教入門」の受講生が、ほぼ100%解答できる状況から、世代間格差が広がっていると思います。

最古の国語辞典とされる平安時代の『色葉字類抄』や、室町時代の『節用集』（江戸期まで改編）など、江戸時代から明治時代までは、辞書配列は「いろは順」が当たり前でした。明治になって、学校教育の場で、『小学教授書』（文部省編 1871(明治 6)年 5 月刊)や、1886(明治 19)年に、尋常小科 1 年の前期に使用することを前提に編集された教科書『読書（よみかき）入門』で、五十音が採用されました。そして、1889(明治 22)～1891(明治 24)年にかけて出版された『言海』（大槻文彦編）で、辞書配列が五十音順へと改められました。

日本人にとって、手習い歌であり、習字の手本でもあった「いろは歌」は、物事の順序を示す「いろは」や、初歩や入門的なものを示す「〇〇のイロハ」とか、江戸時代の火消しの「いろは組」など、多くの場面で用いられてきた歴史があります。一方で、この歌の中に流れている無常・無我という真理や、涅槃を志向するあり方は、この歌の詳細は知らずとも、日本人に仏教的情操を涵養してきたのではないのでしょうか。

龍谷大学の元教授であられる相馬一意先生が、「いろは歌」の現代語訳をしておられます。素晴らしい翻訳なので、引用して紹介します。

妙なる香りを発して咲き誇る花ではありますが、これもいずれは散りうせねばなりません。ものはすべて、かように無常なるものであります。いったい何が無限の存在を保ち得ましょうぞ。いったい誰が永遠の栄華を続け得ましょうぞ。生滅変化する無常の世界を、今日ここに越え過ぎることができたからには、表面の華やかさに惑ってありもしないものを夢見、刹那でしかない世界を常と酔いしれる、こんなことはもはや決してありはしないでしょう。

(相馬一意『仏教がわかる本』伝道新書 13、教育新潮社、1992、pp. 138-139)

英語版パングラムとして、よく知られているものは、The quick brown fox jumps over the lazy dog. (すばしっこい茶色の狐はのろまな犬を飛び越える。33 字) や、Zing! Vext cwm fly jabs Kurd qoph. (ひゅん! 怒ったクームのハエがクルド人のコーフを突き刺す。26 字) という文があります。ドイツ語でも、“Fix, Schwyz!” quäkt Jürgen blöd vom Paß. (ウムラウト付文字、ß も使用した 30 字の完全パングラム) という文があるようですが、文字の特性や母音の数の点で、かなりの困難があり、内容の深さでは「いろは歌」に軍配が上がりません。

中国語では文字の数が膨大（『大漢和辞典』見出し 49,964 番）で、1,000 の漢字が重複なく歌として成立している「千字文」の存在が快挙であると思います。

今年 3 月、父の死に遭遇しました。3 年半の間、週 3 日、人工透析に自分で自家用車を運転して病院に通い、法事や葬儀などの仏参をつとめてくれていました。息を引き取る数日前まで法務にいそしんでいたのです。私が住職に就任して 1 年も経たないうちに、3 月 9 日（旧暦 2 月 15 日）、奇しくも釈尊の涅槃と同じ日に、この世の無常を身を以て示してくれました。

実は、参り合いの組内寺院の前住職が同日に逝去され、11か寺の組内は大わらわとなりました。夜に亡くなった父の方は、一日遅らせて通夜・葬儀をおこなうことになり、その結果、9か寺の住職が連日葬儀に出勤しただけでなく、私は、そちらの寺院の通夜と葬儀に導師として出勤し、前日まで遺族であった住職がこちらの通夜と葬儀で導師を勤められるという前代未聞の事態となりました。およそ未曾有の出来事でしょうし、空前絶後、おそらくこれからも例のないことになるでしょう。まさに、無常の世そのままに、誰もが予期しないことが起こったのです。

この一連の出来事は、「病」、そして「死」を身近なものとして受け止め、無常なる世を生きていることを自覚せざるを得ないこと、COVID-19禍の中、人間として生まれた意味を深く考えよという催促であったと思います。長く教育者として生きた父の、私たち家族への最後の教育であったと思います。

「いろは歌」に込められた、無常を超えた境地を志向するあり方は、時空を超えて、苦悩の中に生きる私たちへのメッセージだと思います。怠ることなく日々精進し、与えられた命を、日々精一杯生き抜いていきたいと思います。

いろはにほへと	ちりぬるを	色は匂へど	散りぬるを
わかよたれそ	つねならむ	我が世誰ぞ	常ならむ
うゑのおくやま	けふこえて	有為の奥山	今日越えて
あさきゆめみし	ゑひもせす	浅き夢見じ	酔ひもせず

## 【著者紹介】

三谷真澄（みたにまづみ）

専門：仏教文化学、古写本学

編著書：『カント哲学と浄土真宗—三谷真来顕彰録』永田文昌堂、2000

『大谷光瑞のトルコでの動向—「仏教」と「農業」のあいだ』（龍谷大学国際社会文化研究所研究成果報告書：共編）、2016

『「世界」へのまなざし～最古の世界地図から南方熊楠・大谷光瑞へ』（龍谷大学アジア仏教文化研究センター文化講演会シリーズ2）法蔵館、2017

『大谷光瑞の構想と居住空間』（龍谷大学アジア仏教文化研究叢書14）法蔵館、2020

『古典籍・文化財デジタルアーカイブ研究センター2019年度研究成果報告書』、2020